攻撃の戦術行動と勝敗の関係性について

Chemistry between offensive strategy and winning

1K06A121

指導教員 主査 倉石平先生

柴田 ひとみ

副査 堀野博幸先生

【緒言】

バスケットボールの競技特性とは「ボールの所有とシュートの攻防をめくり、相対する2チームが同一コート内で同時に相手と対峙しながら、一定時間内に得点を争う」ことである。試合に勝つ要因は、技術、体力、心理的側面、身体的側面など多くのことが考えられ、それぞれが必要なものである。バスケットボール競技は、得点をより多くあげたチームが勝利することができる。またチームスポーツのため、個人的に相手より優位な点を見出せていても、個人を活かす戦術を行使出来ていなければ勝つことはできない。バスケットボール競技の集団戦術であるセットオフenseが、チームの中心プレーヤーを活かすもので、チームの特長に合致し、効果のあるパターンが選択されていることが、試合で勝利するために重要なのではないかと考えた。そこで本研究では、チームに合ったセットオフenseが出来ているのか否か、ということが勝敗とどのように関係しているかを明らかにすることを目的とした。

【方法】

2009年9月5日～10月25日に行われた、第59回関東大学女子バスケットボールリーグ戦1部リーグの全56試合を対象とし、DVDカメラを使って撮影をした。また関東女子学連のHPで公開されているスタッツの数値を利用して、貢献度を算出した。貢献度から中心プレーヤーを出し、中心プレーヤーの特長からそのチームに合っていると思われるセットオフenseを導きだ

した。撮影した映像から、実際に今年のリーグ戦で使われていたセットオフense・各チームの攻撃のパターンを、Power analysis Eizo Jockey を使用して分析した。

【結果】

優勝したTAK大学は、3 out 2 inのセットオフenseを使用していた。攻撃回数(1試合平均102回)、総得点(1試合平均88点)、Fast break・Secondary break 成功数(計142本)において、圧倒的に多い。また、Fast break・Secondary break の頻度が高い。2ポイントシュートの確率が50.4%、OR数、ORからの得点も全チーム中、圧倒的に多かった。最下位となったTAM大学は4 out 1 inのセットオフenseを使用していた。総得点(1試合平均67点)が全チーム中、2番目に低く、Fast break・Secondary break(計54本)が少なかった。毎試合15点以上得点できるプレーヤーがおらず、また3ポイントシュートの得点が低かった。

【考察・結論】

本研究により、セットオフenseがチームの特長をはっきり表現しているチームは上位となり、下位チームはセットオフenseが特長を活かすものではなかった、もしくは相手によって表現させてもらえていなかった結果、敗れていたということが明らかになった。上位チームは中心プレーヤーが役割を果たし、得点をあげており、特長を活かしたセットオフenseを選択していたといえる。逆に下位チーム

は、攻めきれずに終わってしまうケースや、中心プレイヤーの得点が伸びずに敗れていた。また、相手によって、オフENSEの狙いとは違うパターンを選択させられ、理想とするオフENSEを作り出すことができないケースも多かった。

上位チームは特長を活かすセットオフENSEができていたことで勝利し、下位チームははっきりと特長を表現できなかったために、敗れていた。中心プレイヤーの特長を把握し、そのプレイヤーを最大限に活かすことのできるセットオフENSEをチームで徹底し、試合で表現できるか否か、ということが勝敗に影響を与えているということが明らかになった。